

会報

第31号(2015/12/11)

広島県福山市木之庄町 4-3-14

Tel&Fax:084-917-5937

Mail:info@crrc-fukuyama.org



Community Renaissance
Research Center

12月・1月の予定

12月19日(土) 14時〜16時
小物づくり

講師：桑田喜代美さん
場所：NPO集会所



今回は年末年始に彩りを添えるステキな置物です。地域の絆の利用者さんと一緒に作ります。作った作品を持ち帰りたい場合は、材料費500円をお願いします。

申込は、17日までにお願いします。

12月26日(土) 10時〜13時半頃
仁伍もちつき

場所：仁伍広場(NPO事務所前)

本NPOでは、手作り味噌&おでん販売・子ども向けゲーム・リサイクルバザーを出店します。おでんは前日に仕込みます。

どちらも、お手伝いを頂ける方がありましたら、ご連絡ください。「協力よろしく」をお願いします。

【都市農業を考える連続講座】

1月16日(土) 10時〜13時半
野菜を食べていきいき元氣

講師：加納三千子(当会理事)

場所：NPO集会所

参加費：500円

野菜を食べると自分の心や体がどのように喜ぶのか。そして、何故そうなるのか。近年明らかにされつつある腸内細菌達と共につくる免疫の仕組みなどの側面から考えてみませんか。野菜たっぷりの昼食もご用意します。

申込は、1月14日までにお願いします。

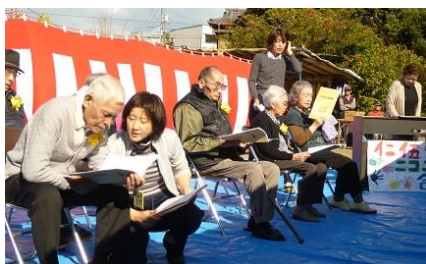
仁伍音楽祭



11月15日(日)朝10時から「地域の絆」前の広場で仁伍音楽祭が開かれました。前日は丸一日雨が降りましたが、当日は打って変わってきれいな青空が広がりました。

開会后、ステージに最初に登場したのは、地域の絆の利用者さんによる『仁伍ニコニコ合唱団』。8月からコミュニティルネッサンスで月一回練習を重ねてきました。NPOスタッフが手作りのバラのコサージュをつけて、17名の利用者さんがステージに上がり、「青い山脈」「瀬戸の花嫁」「上を向いて歩こう」など計8曲を披露しました。

利用者さんが手作りされた看板です



これまでの室内の練習とは違い、ステージでのリハーサルもなかったため、最初は伴奏が聞こえづらく、なかなか声が出なかったようです。また、直射日光がステージに差し込んでいたため、眩しくて暑かったようです。利用者さんの知人の方や職員さんも加わると、次第に歌声が大きくなりました。練習の時のように、利用者さんの目の前に指揮者がいればもっと歌いやすかったのかもしれない。また、利用者さんの近くにマイクを置くことが出来れば、離れた場所で見ている方にも歌声が届いてよりよかったです、と思います。

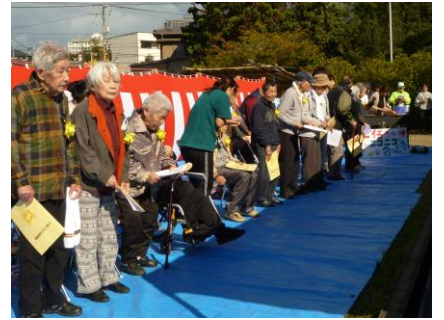
ステージでの発表を終えてコサージュを外そうとすると残念がられたので、お持ち帰りいただきました。会場内をずっと付けて歩かれていました。



輪投げ: 台の上に置いてみました
地べたより、やりやすくなったようです♪

ルネッサンスでは前日5名、当日7名のスタッフが参加しました。輪投げが好評で用意していた景品のお菓子はあっという間になくなりましたが、その後も子どもたちがゲームを楽しんでいました。また、手作りおでんを販売し、50個完売しました。市内で他にも色々な大きなイベントが開催されていたためか、一般のお客様がとても少なく、リサイクルバザーに来て下さる方は少なかったです。全て合わせて、約1万8千円の売上げがありました。

最後は立ってご挨拶
ありがとうございました!



生芋コンニャク作り

11月25日(水)に生芋からのこんにゃく作りをしました。開始時間は14時からでしたが、指導の藤原さんは午前中から、芋を茹でたり皮を剥いたりほかに、試食用にミキサーにかけて凝固剤の炭酸ナトリウムを加えて固めて茹でるなどの下準備をしてくださいました。



用意したものは
芋3個と凝固剤



芽を基点に切り分け、皮ごと30分茹でます

皆さん集まっつての説明のあとで、茹でた芋をミキサーにかける、凝固剤を入れて捏ねて丸める、ゆず味噌作りの3つに分かれて作業をしました。

地域の絆から8名の参加があり、皆さんコンニャクを捏ねたり丸めたりと楽しそうにされていました。

凝固剤を入れたら
すばやく捏ねる!



どんどん丸めて
いきますよ~

試食タイムには、ゆず味噌をかけた茹でたてのまだ温かいコンニャクと、藤原さん持参のサツマイモで作ったキントンをゆずの皮に入れたものを、中島さんと浜井さん差し入れのゆずを搾ったゆず茶でいただきました。皆さん美味しい美味いと言って食べられました。なかには「日本酒があればいいな」と言う方も。また、お土産に2個ずつお渡ししたコンニャクにかぶりつく方もいらっしゃいました。



手作りコンニャク&おやつ
美味しかったですね♪



京都ゆうゆうの里

視察研修ツアー報告 パート2

10月9・10日(金土)、宇治市の「京都ゆうゆうの里」視察研修ツアーを実施しました。前号に引き続き、参加者の方から頂いた感想を、ご紹介します。



「京都ゆうゆうの里」を見学して

三浦 貞江 さん

(施設について)

とても景色の良い宇治に建てられた施設は、8号館もある立派な施設でびっくりしました。掃除も行き届き、シャトルバスも走り、便利に使用しやすく作られていた。

(システム・サービスについて)

お金さえあれば、至れり尽くせりのサービスで、よく考えられていると思った。ただ、今すんでいる場所を離れて家財も処分して入所するには少し考えるところがある。

(職員さん・利用者さんについて)

職員さんは挨拶もよくされて感心しました。ただ利用者の方のいきいきとした表情は窺えず、少し残念でした。大きな施設の中に行き交う人の姿は見えず、朝食のときにこんなに利用者の方がいたのか?と思うほどでした。食事は

食べやすく柔らかめに調理してありました。

(その他)

京都ゆうゆうの里を見学して立派な有料老人ホームが誕生するまでの歴史を知り、私自身の老後の暮らしについて考える機会になりました。終末まで生き生きとして地域に根ざした生活を送りたいと思います。

笑顔でこれからも生きていきたい

今村 純子 さん

外部からの見学者の活き活きとした動きと表情に比べ、ホームの中の食堂で出会った居住者の方々の勢いのなさ、表情の乏しさが一番強烈な印象であった。今回の「ゆうゆうの里」見学ツアーへの参加を希望したのは、以前、お世話になった先生が入所された施設のことがあったからである。70代後半に東京都内のよく考えられたホームに入られた。一年ごとに精気を失っていかれる様子が、年に一度訪ねるたびに強く感じられた。ご本人が望まれた状況とは乖離しているのでは、と胸が痛んだ。施設側からすれば、外部から持ち込まれる病気等への考慮もあるかもしれない。しかし入居後、年を追うごとに、面会をかなりあからさまに拒まれてきた。野の花の好きな方なので、春や秋に花を一束届けても、「お持ち帰りください」の一言であった。

今回、どういふ施設か知りたいと願って「ゆうゆうの里」に訪れた。しかし、ゆうゆうの里で感

じた事は、先生のホームで感じた事と変わらなかった。「行くところではないなあ」という気持ちで帰路に着いた。

その後、見学の時に撮った記念写真を受け取り、見学の同行者全員の笑顔を見た途端に、やはり「こちらが正道だなあ良いなあ」という思いをあらためて強くした。

視察研修ツアーに参加して

田中 真砂子 さん

10月9・10日、一泊二日で、京都ゆうゆうの里の見学会に参加させていただきました。泊まりがけでこのような施設を見せていただくのは初めてでしたし、何しろ源氏物語宇治十帖の舞台であり、浄土思想をこの世に現出したといわれる平等院の所在地でもある宇治に立地する施設ということもあり、強烈な印象を受けました。いくつか感想を述べさせていただきます。

(立地と施設について)

宇治の街を見下ろす広い丘陵地を利用した立派な施設でした。街の喧騒から離れ、眺めも日当たりもよく、敷地の立地・広さといふ居室部分の余裕といい、物理的には(そして健康であれば)さぞ快適だろうと思われました。もちろん共有の食堂(食事は昼・番・朝と3食いただきました)ですが、材料も吟味され、とても美味しかったです。大浴場、プールなどの体育施設、喫茶室、

街に出かけるときのマイクロバスのサービスも用意されていて、すべて至れり尽くせりという感じ。とくに具合が悪くなった時に入院できる医師常駐の診療施設があり、さらには葬祭場であって、ちまたのとりのりわけ一人暮らしの老人たちの心に重くのしかかっている「最期」について悩む必要がないように設計されているのだなと思われました。

(職員さんやサービスについて)

私たちは職員の方々と直接お話ししたり、仕事をみるチャンスはありませんでしたが、とても清潔に保たれていることや食事の質などから推測すると、人手不足とか、質が悪いというような印象は受けませんでした。職員がすぐやめてしまうというような問題はないということでしたし、むしろ誇りを持って仕事をしているように見えました。もしかしたら、職員、とくに中心のメンバーのなかには、クリスチャンが多いのかもしれない。この施設の創立者・長谷川保という人はクリスチャン、それも単に信者であるというだけでなく、この世にキリスト教的世界を実現したいという情熱と構想力・そして実行力も兼ね備えた人物であったようです。老人施設だけでなく、知的障害者、結核患者、精神薄弱者など社会的弱者などのための施設やそこで働く職員を養成するための機関まで作ってしまうというのですから、私はこの人物の並々ならぬリーダーシップとスケールの大きさを感ぜざるをえませんでした。といいながら一方で私自身は

疑問も感じました。その最大のもは、この施設は利用者にとって幸甚な「コミュニティ」になっているのだろうかという疑問でした。

(率直な感想)

この施設を見せていただいたりせず感じたことは、なんと行き届いた立派な施設ということでした。しかしもちろん施設のなかには人がいます。ここで働く職員たちはときどき仕事をしていますが、本来主人公は莫大な入居一時金を払って入居した人たちのはず。ところがその入居者の姿はほとんど見えず、声もほとんど聞こえません。私たち(おしゃべりで、好奇心旺盛、元氣いっぱいな11人も女性たち)が集団で乗り込んだら、個々の入居者と対話にならないのも当然ですが、気になったのは入居者同士の交流もほとんど見られなかったということです。外見だけから判断するのは危険ですが、失礼でもあるのですが、少なくとも外側から見る限り、この施設(コミュニティ)には大きく二種類の人たちがいます。「お世話を受ける側」の入居者と「お世話をする側」の職員たちです。施設の目的からすれば本来のコミュニティの主人公は入居者のはずですが、そして彼らはお客様として大事にはされていますが、彼らは主人公と言えないのでしょうか。入居者は静かに、黙々とサービスを受けています。そして職員は効率よくときどきと仕事をこなしています。ルールに従い、必要なサービスはきちんと行われているのでしょうか。でも何か主客転倒のような気がする

のです。関係性が一方的なのが気になるのです。人類がこんなに長生きをするようになってしまったために、私たちは年をとると自立困難になります。その時どのように生きていくのか、そのような施設や制度を準備する必要があるのか、いろいろなことを考えさせられた2日間でした。

見えてきたコミュニティのあり方

中島 康晴 さん



本有料老人ホーム群を中心に据えた「コミュニティ」は、今政府の示す「日本版CRRRC構想」と非常に平仄の合うものではないかと率直に捉えました。言わずもがな、CRRRC構想とは、経済の効率性を念頭に、都市部の高齢者の受け入れ先を地方都市へ移管するものであり、まさに、暮らしの場を自己決定する尊厳保障とは対極に位置するものであります。まさに、「現代版強制移住構想」と言い換えても差し支えないでしょう。また、アメリカの「輸入品」でもあるCRRRCは、アメリカでは富裕層がその対象となっていると聞いています。その意味においても、本「コミュニティ」は、入居前に2千万円以上の支払いを求

められることから、アメリカのCRRRCと極めて類似性の高いものであると理解しました。

人々の権利擁護の観点において、社会構造で最も必要なのは、生存保障と最低限の生活保障を経済的・社会的に保障する社会保障・公的社会福祉と、生活保障と尊厳保障にかかる地域における人々の社会関係(社会的条件)の整備が挙げられます。本来コミュニティの役割は後者にあり、人々が主体形成をはかるためには、地域の中で、互酬性と信頼関係に裏打ちされた社会関係がなければならぬ観点からもその重要性を指摘することができます。他方、この地域における社会的条件の整備は、制度や政策で担保できるものでもないのです。

この社会的条件を構築する際、旧来からノーマライゼーションが言われ続けていることから、その関係条件はよりノーマルなものが求められます。ノーマルな環境とは、老若男女、立場や思想においても、実に多様な人々の関わりによって形成されるものです。そして、そのノーマルな環境は、本来、自然環境・歴史・伝統・文化・宗教・言語・規模・産業・教育などの多様な構成要素によって構築された実に様々な地域性に依拠したものであります。以上のことから、ノーマライゼーションに不可欠な条件とは、多様な関係と地域性の尊重にあると私は考えています。実は、この「コミュニティ」に最も欠けているものが多様性と地域性でした。換言すれば、コミュニティの中に新しい「コミュニティ」をつくり、その「コミュニティ」を「コミュニティ」から閉ざすことで形成されて

いる「コミュニティ」といって過言ではありません。

いま多くの人々は他者への関わりに煩わしさと忌避感を抱いています。これらの人々の行動変容の背景には、新自由主義などの社会構造との密接な関係が認められるわけですが、この煩わしさを対話や関わりの再構築によって乗り越えることなく、経済の理論によって、一部の富裕層がサービスを購入するという形で、自らの安寧のために新たな「コミュニティ」を構成しているのがこの施設群であると理解するとともに、CRRRCなどはそもそも議論に値しない実に愚劣な代物であることを再確認することができます。

「これら似非コミュニティを伸張していくこと」の最大の問題は、本来のコミュニティの崩壊と、人々の対立の固定化にあります。「コミュニティ」から一部の機能を切り取って、そこから隔絶された新たな似非コミュニティを形成することで、本来の「コミュニティ」の役割を稀釈させ、そして、「持つ者」と「持たざる者」の対立を凝固することに確実な貢献を遂げることになるでしょう。今回の施設見学は、私にとって、CRRRC構想を反駁するための理論構築にとっても有益な経験であったと振り返ります。



高齢者でも責任を分担したい

加納 三千子 さん

緑豊かな広い敷地のあちこちに建物のある風景は、アメリカの団地かテレビでやっていたヨーロッパの認知症の人たちを集めた「まち」を彷彿とさせてくれました。下水処理を含めて、全て「ゆうゆうの里」で管理運営されており、一つの共同体のイメージを受けました。設立者の長谷川保氏は、先進的に病者や高齢者の福祉に取り組んできた人であるとともに、その組織で働く人の教育までを目前で行うことを目指してこられました。ゆうゆうの里もその理念で運営されていることを説明されました。しかし職員さんの提供するサービスの説明はありましたが、その組織の構成員である入居者の方の立ち位置はどうなるのだろうかと思いました。

その理由の一つは、職員さんが「ゆうゆうの里」では〇〇というサービスをしています」という説明ばかりで、入居者の方々は専らサービスの受け手である、という印象を受けたことです。京都ゆうゆうの里がひとつの「まち」を形成しているのならば、その「まち」の構成員として入居者の方々はどんな役割を担うのだろうか、と思いました。

理由の一つ目は、ゆうゆうの里の特徴は「基本的に元気なうちに入居して最期まで長期間にわたり第二の人生を過ごす、終の棲家」であると書かれています。人生の最期には行き届いた介護が受けられてとても安心だと思いました。し

かしてこまでの元気な期間に過ごす時間はどうなるのかなあと思いました。

『高齢者のための国連原則』では、自立・参加・介護・自己実現・尊厳をあげ、その説明の一つに『仕事あるいは他の収入手段を得ること』とも述べています。ベティ・フリーダンは「有給であれ無給であれ、多様な仕事の様式が存在し、やりがい、分かち合うべき責任」がプロダクティヴ・エイジングを実現する、と述べています。

ですから、ゆうゆうの里の職員さんの説明では、入居から最期までの長い時間に、入居者の方々が楽しまれているのは、ゆつたりと余生を楽しむサクセスフル・エイジングを想定したものであるということか、と思いました。

三点目には、介護保険法の改定により、「地域密着型サービス」が導入されました。このサービスは「尊厳のあるケア」をテーマに高齢者が地域で生活を維持しながら「その人らしい暮らし」ができるような支援を旨指すと言います。ゆうゆうの里では入居者の方がそれぞれの暮らしを楽しまれているから、それで「その人らしい暮らし」が出来ていると言えるかもしれません。

しかし先日、ある高齢者施設の職員の方々に、この仕事をしていて嬉しいとか楽しいと感じたことがありますか、と尋ねました。多くの方から返って来た言葉の多くは「利用者の方から『ありがとう』と言われたこと」に類するものでした。そのことは立場を変えてみるとどうなるのか。サービスの受け手の人々も、他の人に役立つ存在となって「ありがとう」と言われたら笑顔も増

えるのではないかと思いました。

ゆうゆうの里の見学をし、改めて私自身がどのように残された人生を生きたいのか、を考えました。そして見学から次のような課題があるように思いました。

一つは、高齢者になっても、具体的にはどんな責任をどうすれば分かち合うことが出来るのだろうか。本NPOで行っている、その人の得手を活かして講座を開くこともその一つであろうが、さらにどうやればその仕組みをより深めることが出来るのか、を考えていきたいということ。

二つ目は、高齢期を迎えて気になるのは、終末期の問題。地域でもどうすれば安心して最期を迎えられるのか。鞆の浦の「さくらホーム」では、施設ではなく自宅での看取りに取り組みられています。その方法や「ゆうゆうの里」の方法を参考にしながら、その人らしい最期を迎えられる仕組み作りを考えていきたいということです。

世界遺産の平等院



普茶料理



宇治観光も
楽しみました♪

編集後記



早いもので、今年も残り半月ほどですね。そろそろ年賀状の準備をしなくては…来年は年女かあ…と汗をかきつつ、年賀ハガキを購入。

ハガキを見てちよっぴり嬉しくなりました。表面の切手のデザイン、毎年なんとなく見過ごしているものですが、物語が隠されていることをご存知ですか。

2003年には編み物をしていたヒツジが、2015年には編みあがったマフラーを巻いていました。そして2004年に一匹で温泉に浸かっていたサルが、2016年になんと一子連れになっている。私と一緒にだ〜(笑) 12年の月日を感じます。おサルさん、幸せそうだよかった♪

明るく輝く新年を迎えられるよう、やり残したことを片付けて一年を締めくくりましょう。今年もありがとうございました。(原)



サルが親子に。
桶もお母さん用?と
子ども用の2つに。

